

# 評 価 委 員 講 師

国 分 義 行

本研究班会議も新しい歩みを開始してから確実に研究の方向づけがみられるようになったことは喜ばしいことである。母子相互作用の研究は従来のような研究とは異なって各学際領域の協同研究によって押し進められねばならないこと、そしてその協同作用が如何にして行なわなければならないかということが、これまでの研究によって明らかにされつつあるが、その土台の上に立っての新しい研究方向がみられるようになった。今回の班会議で注目されたことはこれまでの正常児の母子相互作用の研究から一歩進んで異常児の母子相互作用の研究に進んだことであろう。たとえば馬場班員、内藤班員、竹内班員、小川班員らの研究は未熟児を研究対称としたものであり、岩田班員、野村班員、二木班員、長畑班員らの研究は心身障害児を対称としての研究である。母子相互作用の研究は正常児のみを対称として行うのは不十分であり、それは事実の一面を解明するに過ぎない。同時に他の反面、すなわち障害児についての研究がなされて、始めて母子相互作用の姿が明らかにされていくのであって、この意味で1つの新しい研究の方向づけがなされたことはよかったと思う。また飼育ニホンザル乳児と代理母(人形)に関する研究はこの分野でも動物実験の可能であること、また非常に大切な研究方法であることを知らせたものと思う。

以上のように新しい研究の方向づけと共にそれにしがたっての新しい研究結果のまたれる報告がなされ、今後の研究の発展が大いに期待される。